

9 釣れ釣れなるままに

2016年思い出の釣行記 PART. 3

海からの遅い年賀 鹿島釣狂



自己最身長記録更新 45.2cm

【啓蟄】

玄関チャイムが鳴った。お向かいさんからソウハチのお裾分けだった。夕食には女房がクロガシラを煮付けにしていたので、ピキッと生きのいいソウハチは一夜干しにした。日の出前は氷点下になったが、朝からの陽射しが強く風も出てきてフワリといい具合に仕上

がった。ソウハチの干物はあの独特の臭いが食欲をそそるのだ。

最近では寒気がグングン弛んで、ぽかぽか陽気が続くようになった。その春の暖かさを感じて、冬ごもりしていた虫が這い出すように、私の釣り虫の方も蠢きだした。室蘭L字岸壁の座布団鯉も上がったと報じられた。啓蟄の如く、魚たちもこの陽気に誘われて餌を求めて泳ぎだしたようだ。苫小牧地方の天気予報を調べてみると、強風注意報が出ていたが夕方には治まってくるようだ。3月15日、クロガシラの早場で有名な、浜厚真漁港に向かうことにした。

地下の釣り道具置き場には、ワカサギ釣りのテントやアイズドリル等が散乱している。投げ釣りの方も、昨年12月の釣り大会以来手を付けていない。カレイ仕掛もハリスから先はない。仕掛等の準備をしていると10時出発の予定が昼になり結局13時半になってしまった。

15時には浜厚真港に着いた。駐車帯には7台の車が駐めてありどれも釣り人のもののような。丁度、防波堤での釣りから戻ってきた御仁がいたので様子を聞いてみた。3月初めに釣れだしたという情報を下に来てみたが朝から1度のアタリも見ないまま無駄に過ごしてしまったということだ。私にとっても無駄な時間にならなければよいのだが……。

防波堤の付け根で釣りをしている御仁がいたので様子を聞いてみたが、全然駄目だとつれない返事だ。さらに進んでいくと早春のクロガシラで名を馳せた一等地が空いている。またまた釣りから戻ってきた御仁に話を聞いてみた。この一等地は朝方混んでいたが、釣りものはなく、皆、防波堤の先へと移動してしまったらしい。クロガシラもそこそこ上がっており、5枚ほどを手にした釣り人もいたということだ。港内でも45cm程のものが上がったという。さらに進んでいくと胸壁に脚立を立て掛けて港外に向けて竿を出している人が3名いたので話を聞いたが、釣りものは無いということだった。港内に竿を向けている人はいなかった。

私は、昨年10月末に港内でいい思いをしたこともあり、その場で釣りをすることに決めた。16時には港内に向けて3本の竿を、港外に向けて1本の竿を設置し終わった。強風のため竿先が激しく揺れてアタリは皆目分からない。仕掛をあげてみると餌はちぎられているようでなくなっている。今日は駄目なのかなあ、魚の顔を拝むことは出来ないのかなあと思っている内に他の釣り人は引き上げてしまって、防波堤上は私一人になった。

夕闇が迫ってきた。車に一旦戻っておにぎりを頬張りながら暖をとる。防波堤付け根から一等地に移動していた釣り人も引き上げてしまった。私はその一等地に移動することにした。車から近いので何かと便利だろう。風はすっかり治まってアタリもとりやすくなった。

【明けましておめでとう】

午後7時、ロケットカゴ付きの竿にツンツンとアタリが出た。思わず腰が浮きそうになる。しかし、待てよ、待てよと我慢する。今日初めて目にするアタリなのだ。糸ふけは出

ない。クソー、食い逃げされたか。竿を持って静かに聞いてみるとツンツンと小さなアタリが出た。竿を煽った。手の平級のクロガシラが上がった。1枚でも釣ればよいか。なにせ今年初めての海からの便りなのだ。明けましておめでとう。

それから30分ほど過ぎてから遠投していた竿にゴンゴンと鋭いアタリが出た。大物か。そのアタリが続き竿を煽った。カレイではない。最後までゴンゴンと首を振り続けて上がってきたのは40cmほどのアブラコだった。明けましておめでとう。しかし、あれだけのアタリだったから大物クロガシラを予感していたので一寸がっかり。

若者が背後を通過して声を掛けてきた。バツカンの中で泳がせているクロガシラとアブラコを指し示した。彼は防波堤先端に向かって歩を進めた。

それからまた30分後、今度は遠投に小さなアタリが出た。フグのようなプルプルとした小さく振るえるようなアタリだ。風が吹いていたら分からなかっただろうが、今は無風状態なのだ。しかし、それも続かない。10分ほど待つとまたプルプルと小さなアタリが出た。まだ啜えていないな、しかし、大物のアタリは小さいと聞くぞ。さらに10分ほど待ったが糸ふけも出ず竿先は静かなままだ。くそー食い逃げされたかと、静かに竿に聞いてみた。抵抗感が全く無く、スルーと抜けてきた。やっぱり駄目だったか。餌替えのために仕掛をあげようとさらにスルスルとリールを回していると、グッと急に重くなった。餌を啜えたままこちらに向かってきていた魚が違和感を覚えて反転したのだ。グックと竿を煽る。乗った。ググググッと竿先が刺さり込む。その魚をいなしながら慎重に竿を操作していると、さらにグググググッと刺さり込んでいく。かなりの大物のようだ。タモ入れすべきだろうか。万が一のためにタモは胸壁に立て掛けてあるが、生憎近くには誰もいない。胸壁をよじ上ったりしてもたもたしている間に逃げられでもしたらと考える。ここは一気にゴボウ抜きしよう。胸壁近くまで魚が来た。獲物は見えないが、体半分は海面から出ていることだろう。しかし、魚が重たくてゴボウ抜きは出来なかった。クレーンのように静かにキリキリとリールを巻いた。30号の竿が弓なりになっている。胸壁の上に姿を表したのはクロガシラだった。ひょいと竿を煽ると手前にドタリと落ちた。ハリス4号に結んだ長軸カレイバリ14号を喉の奥にまで飲み込んでいた。恐る恐るメジャーをあててみると45.2cmを指していた。私にとっては、昨年7月、門別港あげたクロガシラ以来の記録物だった。明けましておめでとう。



赤毛を被せた上バりに食いついてきた。

【奇遇】

その後、左隣で2名がテトラ越しに竿を出した。昨年、そこで大物が何枚も上がっていたところだ。テトラに乗ることを厳禁にしている私が竿を出すところではない。その一人がタモを持ってテトラの先に向かった。大物かと思に行ったが30cmほどのクロガシラだった。新たなお客がまたやってきて、私のバツカンの中で鱭を叩いているクロガシラを見た。そして、すぐに右隣で竿を出し始めた。私は寒くなってきたので一旦車に避難した。車からは私の竿先ライトは見えない。向かいに見える火力発電所の照明群に紛れて見えないのだ。右隣で準備し始めた御仁のリチウム電池仕様の竿先ライト2つは緑色に輝いて見える。釣り場に戻ってみると隣は6本の竿を出していた。竿先ライトを忘れていたのだ。彼も今日が今年初めての釣りで、私と同じように、陽気に誘われて慌てるように家を出てきたので、確認するのを忘れていたようだった。

先端方向に向かった先ほどの若者が戻って来ていて、私の左隣でテトラ越しに竿を出していた。なかなかアタリが出ないので、左右両隣3人で釣り談義をしながら竿先を見つめることになった。

右隣は私とは次元の違う釣り師のようだ。オホーツクのサケ、カラフトマス、天塩1本防波堤での真ガレイ、遠別のカスベ、野取湖のコマイ、門別港のタカノハ、湧別川の山女魚、支笏湖美笛川河口のニジマス、寿都樽岸のサクラマスと話は次々と発展していく。フライやルアーにも造詣が深い。アナゴ釣りの話になった。「潜水夫がこの港の中を潜ったところ、崖のような駆け上がりにアナゴが住み着いている穴がいくつも開いていたと教えてくれた。ほら、あそこだよ。是非、アナゴの時期になったらやっごらん。」と話した。

この話は、以前聞いたことがあるぞ。一昨年(2019年)の3月末に、この隣のフェリー埠頭から続く砂浜で、クロガシラを狙っていた時に、隣にいた釣り人が話してくれたものと同じだ。確認したところやっぱり滝川市の夕霧氏だった。この時の記録があったので紹介しよう。

【狼男に変身】

(前略) エサを付け替えるためにリールを巻いていると、横切った仕掛けに驚いたためなのか、波打ち際で小魚がピチピチと跳ねていくつもの波紋を広げている。例によって夕霧氏が「チカではないのか」と言うので、二人して渚に近寄ってヘッドランプの明かりを向けると、小魚の群れが縦横無尽にうごめいている。サビキで狙ってみようかと思っていると、夕霧氏が「タモは持ってきていないのか」と言う。慌てて車に積んであったタモ網を持ち出して、その群れに向かって入れてみた。一気に20匹ぐらいがタモ網に入った。そして、網目の隙間からポロポロとこぼれて海に戻り、その一部が砂浜に散らばった。チカの群れを追いかけて渚を走り、次から次へとタモ網を差し出した。掬っては砂浜に投げ捨てることを繰り返したのだ。ひとしきり砂浜を往復すると群れは沖に去ってしまったのか見えなくなってしまった。今度は砂浜に散らばったチカを拾って歩いた。夕霧氏も加勢してくれた。無我夢中でその動作を繰り返したので汗が噴き出てきた。防寒着を脱ぎ捨てて一服付けていると、また渚がざわめいている。チカの大群が真っ黒くなって押し寄せてきていたのだ。今度は、私の右隣の釣り人も一緒になってタモを手を持ち砂浜を駆け回った。彼はヘッドランプの光りが弱いためにチカの群れを見つけことができずに目暗滅法タモを差し入れた。二人して掻き回すものだからチカの群れもすぐに見えなくなってしまった。もう一度やってくるかと待ち構えていたが3度目はいつまで経ってもやってこなかった。

午後8時半の満潮時間帯の一瞬の出来事だった。今日は新月の大潮である。チカが産卵のために岸寄りしていたのだ。ウミガメやサンゴの産卵、ニシンの群来などは大潮の一時だと聞いている。釣り仲間からもオオナゴやイワシの群れに遭遇して、砂浜に打ちあがったものをエサにしてよい釣りをした話を聞いたことがあるが、実際に目の当たりにしたのは初めてのことだ。オオカミ男が変身するのは満月だったか。今日は新月だがウオーン、ウオーンと遠吠えしたい気分である。

チカの群れの存在と咄嗟のタモ網漁を教えてくれた夕霧氏に50匹ほどを進呈させていただいた。「いいのかい。こんなに」と言われたが、夕霧氏が示唆してくれなかったら、こんな楽しい営みを経験することは無かっただろうと思うのだ。私がチカに夢中になっている間も、彼は自分の竿先を等閑にすることはなく、見事大物クロガシラを仕留めていた。午後10時、私の方は、用意したタモ網で座布団級クロガシラを掬うことはなかったが、この貴重な体験をさせてもらった砂浜に別れを告げた。(後略)

奇遇である。話は進んで、出身地の話になった。私の生まれは新十津川町大和だということ、彼の奥さんも同じだということだ。そして、小さい頃の尾白利加川での山女魚釣りの話に発展していく。夕霧氏は、現在は芦別市常盤に勤務しているという。常盤は私の2年間の勤務地だった。すると今度は、周辺のパンケ幌内川の山女魚、芦別川の虹鱒釣りの話に

進展していくのだった。そして極めつきは滝川卸売市場に勤務している私の従兄弟のことも知っていたことだ。仕事の関係でお付き合いがあったというのだ。本当に世の中狭いものだ。

【再会を約束】

左隣の千歳からの若者は全く聞き役に回ってしまった。話を振り向けると、1才と3才の子どもがいて、もっぱらその遊び相手に徹しているというのだ。サケ釣りだけは奥さんが快く出してくれるという。彼は隙を見ては白老港で竿を振り、真ガレイは100枚を超えたこともあるようだ。最近ではヒラメ釣りにはまっているらしい。私もこの年代の時には釣りなどとてもとても言い出せるような環境になかった。

夕霧氏が「アタリだよ」と私の竿先を見ながら教えてくれた。実は私自身も気が付いていたのだけれど、その声に促されてゆっくりと近づき次のアタリに合わせた。なんだか先ほどのものより若干軽いような気がする。抜きあげても良さそうだと思っていると、素早く反応した夕霧氏が、胸壁に上がりタモを持って取り込んでくれた。40cmほどのものだった。

今度は若者が私の竿に出ているアタリを知らせてくれた。これも夕霧氏が掬ってくれた。これは35cmほどのものだった。夕霧氏が胸壁から飛び降りた。膝を曲げてからピョンと飛んで軽々と着地した。随分と身軽なのだ。自分ならまず胸壁上に腰掛けてから、手をかけてソロリと下りるところだ。私と同年配のはずだがこの身の軽さは、どこから来るのだろう。おそらく休みのたびに磯に立っているからなのだろう。

餌を付けながら夕霧氏の竿先ライトのついていない竿先を見た。ラインに糸ふけが出て隣のラインと交差している。彼に知らせるとおもむろに腰を上げて取り込んだ。35cm程のものだった。さらに同じようにしてもう1枚追加した。

千歳氏の竿先が大きく動いた。テトラの上を伝いながら先に出ていった。私がテトラに上がって手助けするのを躊躇していると、夕霧氏がタモを持ってヒョイヒョイと近づいた。しかし、タモ入れすることもなく上がってきたのは大きなドンコだった。

日付が変わった。イソメも底をついてしまったので引き上げることにした。竿先に使っていたぎょぎょライトを防波堤の際に置いた。夕霧氏に使ってもらえればと思ったのだ。夕霧氏には新しいぎょぎょライトがあるので使ってくれと申し入れていたのだが、糸ふけでアタリは分かれると固辞されていたのだ。夕霧氏がその内の3本を手にしたので、2本をゴミ袋に入れた。やはり遠慮されていたのだ。彼らは朝方にサクラマスをルアーやフライで狙うようだ。また、この次の再開を約束して別れを告げた。



本日の釣果

家には午前3時に着いて、それから寝酒を飲んで床についた。すぐに眠りについたが、6時には目が覚めてしまった。それからは昨日の釣りの余韻を楽しみながら魚拓作りに精を出した。昨年末に58.2cmのタカノハを魚拓にしている所為か、クロガシラはなんだか貧弱に見えた。

この日は、芦別市勤務時代の再会を約束していた仲間4人が「まごころ会」と名付けて岩見沢で酒を酌み交わすことになっていた。わが家には大物1枚だけを残して、他の3人に今日の獲物をお土産として持たせて上げた。奥様に先立たれて独り身になった者には34cmのクロ1枚。夫婦連れにはアブ40cmとクロ27cm、芦別から駆けつけてくれた者には40cmのクロとした。

娘が二人目を身ごもった。悪阻がひどいので、5日間の入院した後、休暇を取ってしばらく私の家で静養することになった。孫も一緒である。ということは孫守をしなければならない。晴天は続いているが、浜厚真港で釣りをしたいという気持ちを懸命に抑え込まなければならなかった。